





3046  
1

圖書  
3046  
1-5

古人曰小說者史之餘也採闕  
 巷之故事繪一敗之人情妍媸  
 不爽其報善惡直剖其隱使天  
 下敗行越檢之子惴惴然側目  
 而視曰海內尚有若輩存好惡  
 之公操是非之筆盍其改志變  
 慮無貽以身後之辱乎然此語  
 平日暇則遊眼于稗官小說一

西刻



日有客談スル永享年中ニテ在ニテ秦織部ナリ  
 者以テ幻術ヲ結黨計亡サント足利家事ヲ  
 甚詳矣ナリ弔喜其奇聞則以俚言  
 俗文錄之ヲ爲十回ト然レトモ懶性不設  
 稿倉卒下筆豈足傳世哉竊備  
 吾遺忘而已安永七年戊戌季  
 秋椿園主人書



兩劍奇遇惣目錄

第一回 腐儒碎硯辭庸主  
 奇童求劍欺愚民  
 曹吉街上讀兵書  
 監物洛中誇劍術  
 溜行爲唱和  
 刀法試高下  
 相釵說吉凶  
 修法退雙敵  
 織部偽名見範佑  
 山懸振勇縛安倍倍

第一回

第二回

第三回

第四回

第五回



第六回

織部乘輿取鯉魚  
雪江忍耻為娼婦

第七回

神威驚賊去  
俠氣為妓死

第八回

奪釵開僧坊  
飛矢辞客亭

第九回

愛兒富賈逢災厄  
貪財汚吏異身首

第十回

誠心切孤婦報恨  
妖術破三士殞命

兩劍奇遇目錄畢

兩劍奇遇卷之一

第一回

腐儒碎硯  
奇童求劍欺愚民

釋名曰劍ハ檢テ非帯と防檢す所以テ良工  
鐵を撰心と正して鍛鍊すの必也靈ありて身を護  
し切業を助く然も色慾あるの劍ハ徳者の人小屬して  
光を収むも小人悪人の小おちてハ鉛刀小ひく差か  
まのそにあぐら及て其端を生ずるの種あるを男子  
常小是を帯るハ魚を制し善を行ふことを忘るる志ん  
がふる韓文公の秋也我をそ邪心邪のりむといふ  
爰ハ雌雄の宝劍を得て叛逆をそらして身を亡せし人



の豪傑ありそその中より小稱光院の法字鑑倉  
乃後領足利持氏は文学を好み侍下清井主馬といふ者  
あり博く經典に通じよく詩章の巧る者なり心正しう  
表不聖賢の道を好むが如くあるも裏不利慾を貪り  
便舌利口ふく諛諂を好むゆへ持氏寧ろ文學を好み  
將ねく秘を其媚をまじひ窺遇するがごとく不持氏  
常不秘を希代の視たりり朝解の使者朴敦之  
が推乃来於世ふく名を童泉研といひ硯池は程よく水  
湧くはくも教て水畫するが如く一日持氏主馬を延  
く招き我異國傳來の硯ありて之を好む教を  
とて其硯を詞法を以てて硯を愛するが如く硯池を

あつて不秘を好む女不侍く一篇の記を作らばく魚あり  
んとある小主馬は硯を好む不文程才素の  
如きもの豈敢て希世の硯を好むを信ずや宿儒碩師  
乃文名を著し命トもまへて謙退しんがもいふ  
汝が高才より作る硯を知らず別は硯を志すく貸あり  
少るもまた物の備はくも硯を好むを信ずるを揮ひ思ひを  
凝すべくと重箱より硯を取出しんがもいふ  
一時の眉目せしありと欣喜小筆を以て硯命を領し雙筆  
の硯を指して持氏の別館幽静あり一回小入案は侍て己の  
稿を起さんとしるが硯は古今の硯は奇宝を文藝  
の徳ふよるが小筆も事よるが硯を以て又その硯を



弄一わらうが折一も夏鳥一して 藤西沛然一して  
思ひかきすも大なる雷鳴一夢耳もふおある如くなる  
よ強きさて持てる硯をいづくに下におくくさるが忽二つ母  
碎くるふ玉馬はたは仰天一五体よ汗を流し面色出乃  
如何に愛し如何にせんかあまも早う一に冷きる祈くる  
ままをを強き雷鳴よ強きき碎一といづく大なる袖奪  
何をいづく人よ面を合せんや自殺せんま如く思ひ定  
めこ小刀を腹中突とんとまう一が傍に屏風一  
儂人鉢より影をまきか画のひらりに眼付て忽ち一計  
を生じ今ま蓋の死をせんより辨舌をぬるひ糸力を  
奪一と主人を欺きいり怒りおぬすんむ一討自殺せん

ゆけく筆をゆるし時を移らむ一篇の文を纏り玉碎もこれ  
硯を持氏の前母持つまは並居る辺にも大に驚いた主人乃  
怒りまかん息をいめて抑ふるふ玉馬はをいづく  
伏し今ぞ生死の場と心を志しめきて涙をまきかま君の命を  
まきかま小部箱を起さんと思ひ一まにまおるふ硯乃中  
より涙と烟霧の如きまきまのちりて存中の満一と大う  
怪しに力もち南宮大ふ一おうして石西陰小碎を一寸中  
まきかまおとつふや否須臾のまらけは條はまきかまおるま  
まきかまに飛騰一ぬ是酷き証ねるに似るまも誰と云ふのま  
一あて変化をあらがう方寸の中身を磨く上々の肉をま  
例あまうと強きまは記しするまをいづくま北夢瑣言







龍雷神の捕へんを巡り逃匿す不持本柱楹或ハ牛  
角不入と記し又老学菴筆記は拾の中に於の屠あり或  
本より其外書に載るる事あり事下に石の目すの如く中  
より不測の水湧出といふ事ありんや於石中に潜むゆふ水  
其るもの如く今漫母於変化の論一篇と著して電流不  
流の如くありてはが飛たるべきを明くふ事あり  
臣不事にして預る事ある中母が於愛あるに迷ふ死を預ふと  
も悔ふ心ありと詞懸向をわけて演説す不持氏之言を  
少くも又をさるる不測の明なきに疑ふ心あり朴敦之が童る石  
と名付るも母の心同くかざるといふ事あり  
怒りの氣色もやしく却る情儀を感ず健文を愛せしき

少事いふ事あるに於て命を逃すれを演説の媚てはしあきふ  
ほ母を信るやうに心をあつて持氏は若く考ふるもまじ  
大ふ巡りて都中に生れしと他邦に於て性を愛して秦と  
名を定まるといふ事あり然るに追捕の情もやまじ尾お  
獲面のもくりに君をとりし農耕を業とせしむるもせむ  
てらじしるる一子あり名を宗音を呼幼きより聰慧群兒  
は捕まひ父事にして經典の通達をわゆるふ一をゆてすと  
才ありて十歳の時父而中に遊るの花はるるをみて戲  
は母一詩を賦せんやといひける声不意下り  
海棠巧笑畫簾前 片々追風霖雨天  
宛似昭君辞漢去 胡塵日減嬋娟

西列

三三











多分おまきで幼年あて必易きゆ人おく宗吉を扱きてこれと漢  
 しめ又返問を執りて漢めをせかぐきもふはて書計を漢  
 お一人の花子扱かてひ我屋の夜股を竊りおきて花子の  
 一の遠き扱きあつてはの作まつりおし兼て見覚えしるお  
 ちとて趣がま父の方より来る事言ひおし花子におき  
 丹州とらまあつておそと趣がまおきりりおていつもの如く宗  
 吉と扱きてお状とよまめもまじりて父之く痛玉解く苦  
 めと針葉の林おとほりもまじりて我廿西の金を輝て  
 又種るまじりておの思もおく父乃痛くまを  
 中におきまもあつて十西の金と出しお言ひま問の  
 ちかておしおしおまお言ひてお見の書おし

遠くおまきと書かすさつて金おまお宗吉不  
 返書を健し御しおは理せりと宗吉の花子扱かてはひ  
 けお花の人のおまおめくまは海へおまおまおお  
 て花子おおんとすおふらるてまをばおしお花子あ  
 ひお働まおつて奪ひ一金おまおまおおらおまおの言  
 おつておしおておんとすおば宗吉おまおおらるるか  
 をおちらんとおらおの御とてお二人使付んとすお令  
 をばおまおはと書かておとておらるるまおまお  
 とおまおの御傍の流しお押倒しおらるるおまおお  
 又おらるるおまおお授おておらるるお宗吉力及おまお  
 るるお方おらるる西もお持べきお程の石とておまおお















自ん苦く... 一盃の薄酒を酌て... 是と謝す... 今日國を治る... 曹吉が... 治川の先陣を... かく後編らる...

す... 大將士率心を... かくも軍令... 伍を乱す... 乃切城を... 婦人の如く... 陣中紛乱... かくも何ぞ... 軍つよ... かくも後世附會の...



高麗王とて海にまじりて物にゆくこと才氣を感ずる我多  
 手教百の門人交授すまじも母が如くまじりてゆくまじり  
 書の旨ふらるる通じらるるものとて手教すずてまじりて下  
 手教軍師の如くまじりて事師弟此約盟の如くまじりて  
 自ら言あはれまじりて授くまじりて母の徳表美しける宗吉も  
 らぬ恩恵の詞を謝し不敏を厭ひまじりてまじりてまじり  
 して弟子の禮を執んとまじりてまじりてまじりてまじりて  
 まじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじり  
 て心を深ま授くまじりてまじりてまじりてまじりてまじり

西劍奇遇卷之一終



